

大地

第 63 号
2021. 5. 15. 発行
浄 國 寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

正念寺全焼火災に遭いて
山崎 睦

一瞬にして父と子を呑みし火事

八畳の假本堂も春に入る

濃く淡く芽吹きもつともよき山路

新樹光意外に小さき虚子の墓

万緑の萌ゆる息とも山気とも

名水も瀬音となりて谷若葉

句集『朝の光』より

平成十一〜十二年

大地バックナンバー

山崎隆史

浄國寺のホームページを少しづつ更新しています。二月末の更新で、寺報「大地」のバックナンバーをすべて登録できました。良ければご覧ください。

昔の「大地」を読んでもうやましく思うのは、色々な方から寄稿いただいている事です。うれしいことに、前号、今号はご門徒の方の原稿を掲載していますが、こしばらくは、寺族（寺の僧侶およびその家族）の文章ばかりということも多く、以前とは大違いです。初期の「大地」では、毎号のように、時には一度に複数、ご門徒からの寄稿がありました。俳句や短歌なども寄せられていました。レイアウトも自由で、ページに変化がありました。

一因として、私が決められた文字数を正確に守って原稿を書いている事もあるのではないかと考えます。他の人も、以前よりも文字数を揃えるようになったような気がし



もと浄國寺ホームページ
←左のQRコードを読み取るか、
<https://joukokoji.yukimizake.net/>
↑のURLを入力してください。

ます。きつちりしすぎて、あそびが無い紙面になってしまっているのではないかと。またそのせいで寄稿のハードルが上がっているのではないかと、と危惧するのです。

という事を言い訳に、もつといい加減な文章を書くようになります。文字数は多かつたり少なかつたり、内容もゆるく、オチも無く。この文もそろそろ終わります。今後とも「大地」をよろしくお願いすると共に、「大地」への寄稿を重ねてお願いいたします次第です。

そんなに急いで

山崎隆史

自動車を運転していると時々、猛スピードで乱暴に追い抜いていく車があります。以前は少し腹を立てたりしましたが、今はもう腹が立ったりしません。

ある時、乱暴に追い抜いていった車に向かって「おしっこ漏れそうなのかな」とつぶやいてみました。本当にそのようなように見えてきました。あれは大変なんだよなあ。同情心すら湧いてきました。応援する気持ちになりました。がんばれ、トイレに間に合うといいなあ。以来、猛スピードの車を見ると、漏れそうなのだと思ってしまう。

今はもう腹が立ったりしません。少し愉快です。

葬儀が終わって

北本町3 横関レイ子

十二月の中旬、私の夫が胃癌で亡くなった。通夜式と告別式は、例年のない早い初雪が降り続くなかで執り行われ、弔問に来て下さった多くの皆様は大変申し訳ない思いがした。

そうして葬儀が終われば一人暮らしが待っている私に、初七日の法要の席でご住職はこんな話をして下さいました。

ある豪雪地帯の山あいの部落に、高齢の女性が一人で暮らしていた。冬の極寒期には家の周りを全て雪で覆われて、昼間でも電気を付けないといけないような苛酷な環境だそうである。雪深い二月にそこを訪れていったお坊さんが尋ねた。

「おばあさん、こんな所で一人でいてさみしくないかね」

すると、その高齢の女性はこう答えたそうである。

「さみしくなんかありません。春になったらあれもしよう。これもしようっていると、ちっともさみしくありませんでね。」

お坊さんは「ああ、仏性未来とはこのことか」と頷かれたそうである。

彼女は、雪が消え春になり茶色い土が顔を現す時、その喜びを他の誰よりもよく知って

いる。だからこそ一人で過ごす冬の間の厳しい生活にもさみしくないのである。

花が咲けばうれしくて花を愛でる優しい目をしていて、また小鳥のさえずりが聞こえれば素直に聴く耳を持っている。そしてお天気の良い日には、畑仕事に精を出しているのだろう、と私は想像する。

おそらく彼女は雨の日は雨の中を、風の日には風の中を、そのまま受け入れ歩んで来た、だからこそ、冬の極寒期の一人暮らしに春の喜びを感じ「少しもさみしくない」といえるのであろう。

「和顔施」(無財の七施)の教えがあるが、たぶん彼女はすてきな笑顔をしているに違いない。家と家が離れた山の部落の一人暮らしでいても、彼女は周りの人とのつながりを感じている、だからさみしさを感じることは一年を通して決していないのだ。

私の友人は、私の夫が癌で入院していると知っていたが、新聞のお悔やみ欄で夫の死亡記事を見たとき、朝一番に震える声で電話をくれた。その声を聞いた時「私は独りではない」と強く感じる事ができた。また別の友人は彼女自身も癌患者であるにも拘わらず、雪が降る寒い晩に弔問に来てくれた。そして、お通夜の席で、泣きながら私を抱きしめてくれた友人もいる。

今からちょうど十年前、菩提寺を探してい

た私達夫婦は先代の大奥様に相談に乗っていただき、新しい檀家として浄國寺に温かく迎えて入れてもらう事ができた。お陰で柏崎の姑のお葬式を無事に出すこともでき、夫のお葬式も済んだ現在、私はこうして「大地」の原稿を書いている。

私は周りの多くの人々に支えられて生かされているのだと、いま改めて感じている。その感謝の気持ちを忘れることなく、これからの日々を過ごしていきたい。さらに山の先輩の女性を見習って、前向きにけれども女性らしさを失うことなく、しなやかに生きていきたいと思っている。

しかしそれでも、葬儀が済み子供達もそれぞれの家庭に戻り、私一人で外出先から帰り玄関に入った時、家の中にこれまで経験したことのない冷たい風が一瞬吹き抜けて入ったのを確かに感じた。そして、ほんのちよっぴりだけ私は泣いた。

横関 仁さんが逝去されたのは師走の十三日その日は、今冬の雪の降り始めて寒い日であった。

仁さんは、いつも笑顔で静かに穏やかに話され、接する者はゆったりと相手をする事ができた。

一方、卓球の指導者としても活躍され慕われておられた方でもある。

法名は『釋仁和』享年七十四歳。

ワン公物語

—華のつぶやき—〔最終回〕

山崎 華（慎子代筆）



私は華。パグ犬の雌。二〇二一年三月二十九日で十三歳と九カ月と二十九日。

この日私は生涯を閉じた。母さんの膝に心も体も想い出も一切を預けたま、最後のひと息を吐き、この世にサヨナラをしたのだ。

私はこの家で私らしく生き、ひと通りの困難もくぐり抜けて生き切ることができたと思っている。

パグ、と言う改良？を幾度も重ねながら生み出された犬種であるから、寿命はあまり長くないことは承知していた。先住犬であった蓮姉ちゃんは十三歳二カ月で、四日程病んでいなくなったのだった。

私ときたら結構丈夫なワン公だったのに、十三歳になった頃から体調を崩し始め、次々に病名を付けられ、十一月の初めにはあるうことか、ご飯も受け付けなくなってしまったのだ。食事の度にあんなに激しく吠えて催促していたのに。どんなになだめられても全く食べる気がしない。同時に膀胱の感覚も鈍くなり頻繁に排尿。水ばかりでご飯を食べないからおなかはゆるみ、それだっであっという間に勝手に出てしまう始末。

皆が居る時なら、すぐに片付けてくれるか

ら助かるのだけれど、時により夜半などにやらした時が困るのだ。私の感覚がまだまともで、多少でも体を動かすことができた頃はそんなに困らなかつたのだけれど、そのうち下半身が汚くまみれてしまうという有り様になってしまった。

皆、本当に厭な顔ひとつせず、気付いた時には素早く対応して温かいタオルやアルコールできれいにしてくれて、私は黙っていたけど本当に嬉しかった。毎日汚れたタオルを洗うのに何度も洗濯機を廻し消毒する日が、どの位続いたことだったろう。

食いしん坊だった私が全く食べなくなってしまうって、母さん達は私がもう長くはないと判断した。周りの人達も「食べなくなったら近いわね」と言ったので、父さんと母さんは覚悟を決め、看取りに入ろうと決めたのだった。痛い思いをしたり苦手な薬を飲ませることは一切止めて……。だから十月三十一日を最後に私は獣医さんにお別れをした。

私の本能がさせた“断食”が功を奏したのか、間もなく私は再び食欲をとり戻すことができた。やがて寝たきり状態から、立ち上がってスタスタ歩き、時には吠えたりもして、そのことを皆が心から喜んでくれた。

その頃から私の食べ物はドッグフードだけではなく、様々な犬用のおやつ、そして母さんがゆで野菜を用意してくれたのだった。大

根、人参、キャベツ、白菜、芋、蓮根等々。野菜の旨さに私は目覚め、野菜は私の腸の掃除もしてくれたようだった。

六カ月近く、や、好調と不調を繰り返してその間に大雪が降り、母さんの突発性難聴による緊急入院や、父さんの検査入院、母さんの百五歳のお母さんがとうとう亡くなったりと、世の中のコロナ騒ぎの中で私のいのちも終わりに近づいていた。

最後は当然ほぼ寝たきりだったので、床ズレも大きくえぐられ、それを見て直子姉さんは涙ぐみ、その姿を見て母さんが「あなたは見てはダメ」と言って涙ぐむということが繰り返された。母さんは獣医さんに見せなかったのは誤りだったかも、と思いつつもあつた。

そして母さんは私と二人きりである時「華、もう頑張らなくて良いよ、楽になって良いんだからね」と囁き、その一方で「私が楽になりたいだけなんだ……」と落ち込んだ。

母さん、みんな分かっていたよ。そんなに思い煩わなくても大丈夫。「その時」が来たら、私はそれに従うのだから。それ迄はちゃんと負担をかけるかも知れないけど、もう少し側に居させてね。

三月二十九日は、母さんのお母さんの本葬の日だった。コロナのことがあり、母さんは

密葬も本葬も断念して、でもそのお陰で！私は最後の日々を母さんと離れないでいることができたのだった。

その日、母さんが外出から帰り「華、待っていてくれたね」と言ってお私を抱き上げてくれた。筋力も無くなっていた私は、全身が緩んでしまった状態で母さんに抱かれた。母さんが全身をなでてくれる。私の目は見開いたま、なのだけれど、実はほぼ見えていないのだ。耳も遠くなっていたけれど、全身の感覚で、母さんの腕のゆりかごの中にいることは感じていた。

『今日は死ぬのにもってこいの日』父さんの蔵書の一冊、ネイティブ・アメリカンの族長の不思議な言葉に導かれて、私は最後のひと息を吐き、母さんの腕の中で命を終えた。母さんの記録によれば午後四時四十分。口呼吸に変わって、やがてまるでローソクの火が消えるようにフーッとひと息を吐いての最後だったそうなの。

マ、イイカー！の一生 ナムアマミダブツ

図らずも人生の後半二十五年を犬達と暮らすことになるうとは。ハイジ、蓮、華、と個性豊かな彼らとの思い出は尽きない。とりわけ「華」の生と死は、私自身が年を重ねた分、やるせなさや思いの外深いものがある。「華」のつぶやきに乗せられてのワン公物語もついに終りの時が来てしまった。(慎子記)

夏雲多奇峰

山崎 直子

春水満四澤
夏雲多奇峰
秋月揚明輝
冬嶺秀孤松

マスクと消毒液が欠かせなくなってもう一年を過ぎ、かといって「この日まで」というのはつきりとした約束もないままの暮らしが続いています。去年は結局真夏になっても毎日マスク着用という誰も体験したことのないような状況が続きへコロナにも気を付けて、でも熱中症にも気を付けてというテレビからの注意を聞きながらため息が出たものです。

冒頭の陶淵明の漢詩は、外出の機会も減る中で、一年の移ろいにすら鈍くなりそうな自分への自戒も込めて挙げてみました。

春は雪解け水があちこちの沢を満たす
夏は多くの雲が奇妙な嶺に似た形を作る
秋は月が明るく輝き中天に揚がる
冬は嶺に独り立つ松の姿が際立つ

古代中国の詩人が見て美しいと思った自然は、現代を生きる私たちにとってもやはり美しいものです。たとえ私達自身にそれに気付く心の余裕がなくなっていたとしても、季節も生き物も淡々と日々の営みを続けていくことに変わりはないのでしよう。

道々の藤の花も庭のツツジも、ここぞとばかりに満開です。ワクチンの話題を聞かぬ日はないこの頃ですが、そこから少し気持ちを離せばすいと伸びるハナミズキが目に見え込んできます。田んぼに張られた水に、低く飛ぶツバメに、確かに日々は進んでいると励まされつつ…。

これから迎える夏も猛暑の予報ですが、千六百年前に詩人が「夏雲奇峰多し」と詠んだ空の高さを同じのびやかさで見上げたいと願う、GW明けの一日でありました。

※毎回元気に呟いてくれていた華ちゃんを、皆で見送りました。小さな生き物の、その一生の短さゆえに残していつてくれたものを、忘れずにいたいと思います…。